

Title	各國植民史及植民地の研究(大鹽龜雄著, 巖松堂發行)
Sub Title	
Author	有賀, 春雄(Ariga, Haruo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1939
Jtitle	史学 Vol.17, No.3 (1939. 4) ,p.525- 525
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19390400-0185">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19390400-0185</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

しても注目すべきものである。前著と同様に、同一譯者の手にな  
る英譯 The Rise of European Civilization, New York, 1938.  
が出てゐる。(本文四八六頁、價二十五フラン) (平山榮一)

## 各國植民史及植民地の研究

(大鹽龜雄著  
巖松堂發行)

今日我が國は大陸政策に乗り出して着々東亞の新秩序を建設し  
つゝあり、また歐羅巴に於てもドイツは舊植民地の返還を要求し、  
イタリもまた地中海に於てチユニス、ユルシカを要求して國  
際政局に一波瀾を巻き起したが、これらの事象と關聯して、今や  
植民地問題が世界的大問題として根本的に再検討されんとする  
とき、先づ過去に於ける諸國民の植民活動を發展的に辿り、今日に  
見るが如き植民地が如何なる史的發展の結果であるかを認識する  
ことは最も緊要であつて、今茲に大鹽氏多年の研鑽が「各國植民  
史及植民地の研究」と銘打つて上梓されたことは寔に時宜を得た  
ものとして欣快に堪へざる次第である。本書は古代のエジプト、  
ギリシヤ、カルタゴに筆を起してスペイン、ポルトガル、オラン  
ダの活動時代に及び、更に第十九世紀を主として、フランス、イ  
ギリス、ロシア、ドイツ、ベルギー、イタリ、アメリカ合衆國、  
日本と順を逐うて各國別にその植民活動を敘述し、その航海發  
見、植民開發の經過、更に各植民地の現状に就て詳細な説明を施  
したもので、菊版、九ポイント組、五百餘頁の大著であるが、そ  
の敘述の整然たるは感歎すべきであり、如何なる部分に就てみて  
も極めてよく纏りがついて居り、而も説明に不明瞭な點のないこ

とは聲を大にして推稱し得ると思ふ。然し何と言つても本書の取  
扱つてゐる時代は古代から現代に及び、而も世界の凡ゆる植民國  
家と植民された凡ゆる地方を網羅するものであるが故に、その各  
部分が極めて深い研究であるとは言はれ難いが、この種の文獻の  
殆ど皆無である我が學界に於ては貴重な收獲であると言はざるを  
得ない。只だ一つ二つ慾を言へば、非常に多くの地名が出て來  
て、一般の讀者には地理的理解が頗る困難のやうに思はれるが、  
もう少し多くの參考圖を挿入して讀者の便に供してほしかつた  
と思ふ。また挿入されてゐる地圖の中に明瞭を缺くものが少なから  
ず目にとまつたが、もう少し明確な圖版の作成が出来なかつたの  
か、著者が地理學にも造詣が深い筈であるが故に特にこの點を希  
望する次第である。更にまたこれ程の力作にして索引の缺けてゐ  
るのはどうした事であらうか、責任ある研究書には索引を附する  
といふことは一般の常識であるのに著者がこの點を閑却された  
とするならば甚だ手落であると言はねばなるまい。願はくは重版の  
際、右の如き缺點を除かれん事を希望する。尙ほ全體からみて古  
代中世が極めて簡略であつて如何にも物足らないが、もう少し詳  
細な研究の結果が附加されたならば完璧な植民史となることは疑  
を容れない。然し斯かる瑕瑾にも拘らず、本書が堂々と世に問ふ  
べき大著であることは勿論であつて、歴史學徒はもとより、一般  
讀書人の一讀すべきものとして推獎する次第である。(定價、四圓  
八十錢)(有賀春雄)